

オニ章 オ百三十七師団の状況

オ一節 オ百三十七師団の編成及び終戦迄の状況

一 師団の編成

オ百三十七師団は所謂南東軍根こそぎ動員により昭和三十年七月編成せられたり。師団の編成は先づ大隊以上の本部、司令部人員を南東軍警備隊司令部の擔任を以て安東に於て充足し次に飛羅南師管区司令部の擔任を以て南他の兵員、兵器、被服其の他の裝備を充足せり。

師団將校の大部及一部の下士官兵（本部及司令部附）は在満應召者を以て充当せられたりしが不可応用者ありし者多し。

二 師団の裝備

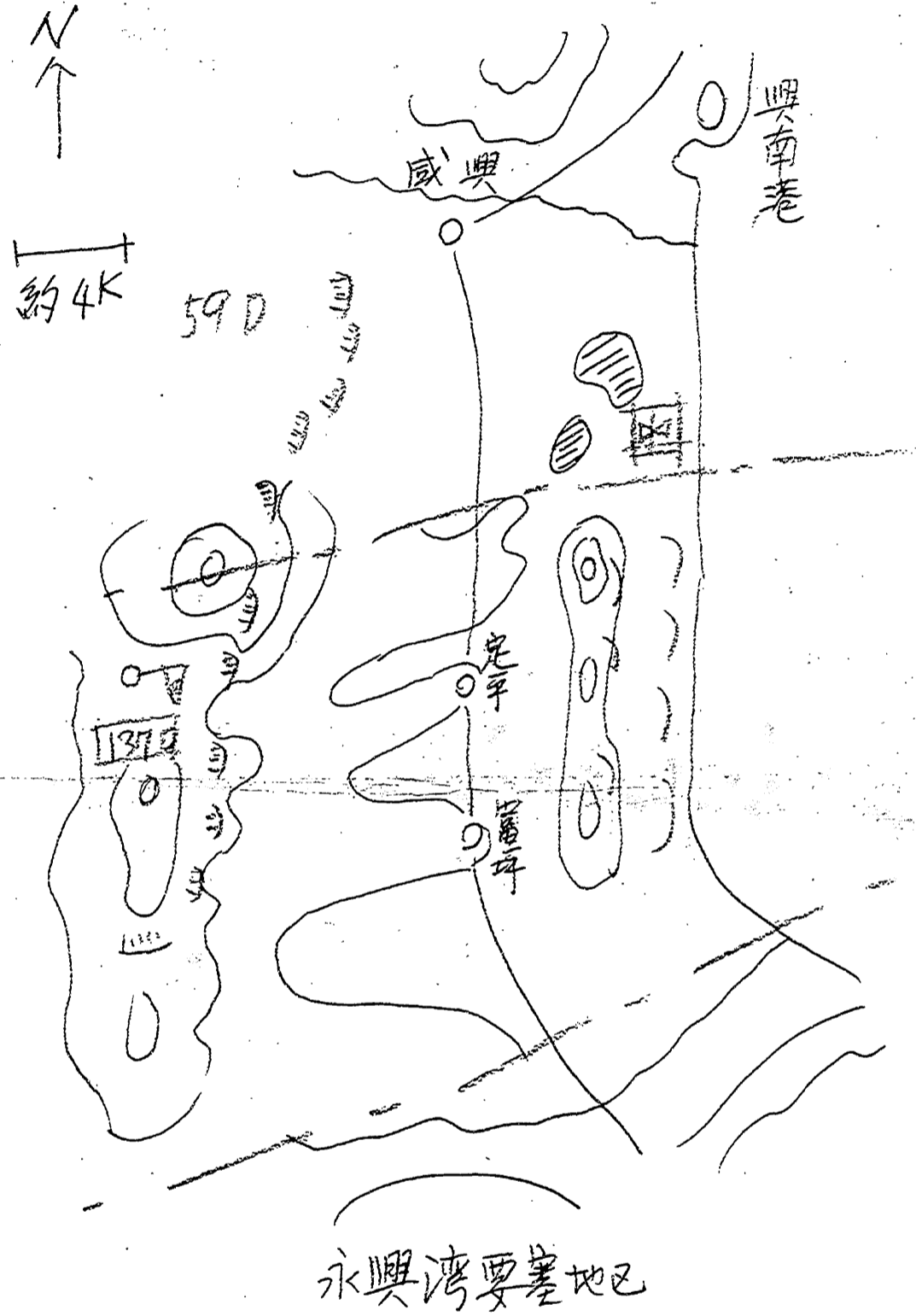
師団の總員は約一万名定むるなり。

師団の兵器裝備は小銃及軽重機を除く火砲其の他は南戦時尙滿州各地より輸送中にして遂に之を受領するに至らず。

又築城・築營資材悉くなく歸成途中急ぎ南嶺に人を派し  
収集せしも安平に於て交付し得たるは大隊に鑑一、中隊に斧  
一の有柄なりき近接戦資材亦極めて不足しありたり。

三、師田の配備

師田は軍の企図に基づき右ヤ一線師田として次回、如く定平高  
坪西ノ高地帯に麓の東面して陣地を占領す。



四、師団の戦力及補給の状況

既述の如く師団は辛うじて人員編成を了したる有様にし、火砲皆無、築城及近接戦斗資材亦極めて不十分の状況なり。

糧秣も亦僅少にして屢々軍に要請せるも、終戦当日に於て師団は僅かに三日分を保有するに過ぎず、而も輸送の爲め自動貨車は僅かに三輛を有するのみにして副食物は貧弱なる現地調製の外なく極めて憂慮すべき状態に在りたり。

五、部隊の素質、団結、訓練其の他

兵員及部隊の下級将校は羅南師管区の努力に依り一般に素質良好なりしも、師団司令部部長級は何れも走令者及病弱者、歩兵連隊長も一般に走令者にして隊務に於て経験深きも戦場活動は十分ならずざるべきを懸念せらるたり。

更に師団の編成に於り大部の將校が在番不可用員より召集せらるたる為、年配者にして隊務未熟且訓練の余裕なかりし為、少

なからず懸念せうべかり。

師団として繁忙なる務の向田結の速成を四り且戦斗必須の要  
目に限定して訓練に務めしめたるが、各隊長の努力と相俟ち短  
時日の間に急速に向上し来りつゝありたり。

又多数の朝鮮人兵を含みありしが、軍凡紀吐の事故重傷者  
は一姓名も生じざりき。

六、通信は軍司令部との向は有、無線により終始連絡も保持せら  
れりしも、隣接ヲ五十九師団とは陣地占領に伴ひ態勢移動の  
為十分なる連絡を取り得ざる間終戦となりたり。

永興要塞守備隊とは軍經由にて連絡せり。

師団作戦地域内にては通信器材不足せるのみならず広地域の配  
備たるは地形錯雑のため視覚通信網の構成に着手せり。

オニ節 終戦及爾後の状況

一、指揮關係及配置の変更

日本の降伏終戦は全部隊に言ひ知れぬ衝動を与へしも辛に行動  
上此の動搖素乱もなかりき。

師団は終戦と共に軍の数次の命令へ定平、富坪地区に集結↓永  
興に亘る鉄道沿線に集結↓定平、富坪地区に集結↓定平、永興  
地区に集結しに依り集結準備を逐次変更着手中師団はオ十七  
六面軍直轄となり給養及治安配備の關係上歩兵一連隊を元山  
に爾余の主力を平壤に移動すべく命せらる。

斯くて鐵道輸送中、元山には既に蘇軍の一部進駐せるため該方面  
に輸送中の歩兵オ三七五連隊は反転して平壤に向はしめ師団後  
尾部隊として蘇軍代表平壤發行場進駐直前平壤に到着せ  
り。

尚師団司令部の一部は自動貨車五輛を以て峽難なる春稜山  
系道を突破して蘇軍到着の直前平壤に到着す。

ニ其居の状況

1. 師団の諸部隊は平壤到着后直に平壤師管区の好意により同市内兵器中學校等に分宿せり。

師団の糧食は極めて僅少(三日分を携行)なりしを以て同地航空支廠、兵器支廠等に交渉すると共にヤ十七方面軍に連絡せる結果水色の集積糧秣より補給を受くることになりしか、爾后蘇側の土城、周城間鉄道遮断により不運となり平壤師管区より補給を受くることになり。

2. 蘇側將校の平壤到着后師管区司令官の命により師団諸隊は秋乙地区に移動し歩兵一連隊は三井炭行機工場に、其の他の部隊は秋乙の小学校を利用する外露管せしめ、其の翌日更に歩兵下士官候補者隊兵器に司令部は師管区の兵器部、経理部庁舎に移動せり。

3. 蘇側は当初ラーコン中佐平壤飛行場に到着し、師管区司令官と現地停機協定を行ひ、次いで蘇軍司令部に到着し、秋乙地区

に日本軍諸部隊を集結せしめ、次で美勤堂康舎に將校を、三合野康舎に兵を收容し、其向兵器薬業其他の軍需品を接收せり。

被服及糧食は当初鮮人向に大部ばらまかれしも蘇側は後に至り之を回収せり。

4. 蘇軍の進駐部隊の兵器兵力は不明なるも航空の外憲兵、自動車部隊、高射砲部隊等を見る。

日本軍隊及居当民に対し之は一般に優かなりしも他方ハ朝鮮人の解放、此等に対する裏面工作により日本人迫害逐次甚り又平壤に出来たる砲台維持会が対日本人態度も逐次悪化せり。

不良鮮人及蘇軍將兵の日本人進出、家宅搜索、掠奪暴行等頻発し、殊に北方より南下し平壤の市内、女学校等に集結せし日本人は可なり困難を呈せる生活状態に陥れるが如きも蘇側には何等積極的の之を救護せず、辛うじて居当民会等にて蘇、鮮側と均衡



し、護命を果せり。

此の由、京城よりオナ十七方面軍參謀長井原少將を來し、蘇劍と日本軍の停戦に伴ふ位置、居當氏の保護、お母保持等に關し、交渉し又肝管区としても蘇劍と累次交渉せるも、交渉其のものは何時も俄に變調なりしが蘇劍のやり方は全く欺瞞遁約に終始せるのみならず、且指令は詭突突略にして大なる困難を來したり。

殊に將校と分離の中、左兵の三合里廣舎收容の如き、凄亂甚だしく名状すべからざりしものありしか、如く其後、小生の目撃せし所においば、同處舎前後一里の並道には、軍各種兵器、車輛、被服、衛生材料等、堆高く放棄さし、蘇軍將兵之を獲り、蘇人獲り、ラスくと、鳥中煙れ、其の残骸の有様は、ナホレオンのモスタフ、遺遺を想はし、たるものありき。

と、師田は在滿、應召將校大尉なりしか、終戦直後、滿州に於ては直ちに除隊せしめたるか、如きも、師田には其等のこと全く達せらぬ、いかに、平壤

に到り南東軍の后退部隊より始め之耳にせり。唯若干の擄枝は希望により平壤到着直后滿洲に歸し又オ三回にはオ十七師面軍の命令により平壤警察補助員より若干を派遣之等に隨時滿洲へ歸る様云ひ渡せるも同擄枝は平壤鮮米貯蔵會社に押当せられて廢舎に歸さし又其の後の情報によれば初め選したる擄枝も途中埃へうの兵廠倉庫に(変更せる處)投せらる者多き由なり。又日本軍隊の廢舎收容所平壤附近に於ては蘇側の日本人兵類繁に行はし三合里兵廠舎に投入せらる又三合里兵廠舎よりも脱走者多かりし模様なり。

美勤堂擄枝收容所に收容せらる者は平壤師管区部隊、大鮮西部地区(安東迄)の兵事部、憲兵、病院、兵器支廠、航空廠、海軍炭坑の海軍擄枝、オ一三七師団、南東軍補給監部、築城団、第行隊、飛行場勤務部隊等の外警察、道知事及オ一二の師団の歩兵一連隊等にして其等の内一部は若は投獄せらる或は蘇側により別

包に置致せらぬたり。

食糧、被服は各隊携行ものにより先づ当分は不足せぬりき。

又収容所に於ては蘇軍将校は頻繁に検査と称し長靴、時計  
剃刀其の他私物品を掠奪せり。

0824